

なるほど

コロナ編

(ながい副題)

危機感、スピード感を持って

総合的 俯瞰的に、

でも責任感を持たずに判断した

照
伝光

承前（前書に代えて）

大家（おおや）、読んで字のごとく多数の不動産を賃貸する資産家だ。ほとんどが高級マンションやテナントビルだが、その中で異色なのが駅から少し離れた川沿いの二階建ての木造の長屋だ。各階四戸ずつで今にも倒れそうな古びたアパートだ。その二階の端の部屋に無職の田中という青年が住んでいる。大家の計らいで家賃は無料。それは田中の部屋に不思議なテレビがあるからだ。

田中がこのテレビの入手した経緯は「なるほど」シリーズの1（第一編）の第一章を参照のこと。ここではこのテレビの驚くべき性能を強調する。

まず古い。とは言っても大昔のブラウン管テレビではない。一応液晶テレビだ。サイズは三〇インチだがベゼル（縁）が広いので全体の大きさとしては四〇インチぐらいになる。アンテナもコードもない。それでも電源は入るがスイッチはない。

視聴できる番組は一つだけ。つまりチャンネルは一つしかない。その内容もニュースのみ。しかもニュースキャスターは山本という若い女性だけ。ときどき上司の逆田（さかた）という男性が出演することもあるが。

放送内容は政府など権力者への批判。どこでどのようにして取材したのか、政治家や官僚た

ちの悪事を暴く。読者がよく知っている番組で言うと「水戸の校門」「近くて遠い桜の金さん」
「大岡H前の守」^{かみ}のような感じ。ただし印籠や桜吹雪の出番はない。

権力者たちがおもし悪行を重ねていけば、これを国民に知らせるべく報道するのだが、ここに大きな問題がある。その放送はこのテレビでしか見ることができないのだ。

しかも田中や大家たちが住む世界は我々の世界とは少し異なる。たとえばこの物語の世界では未だ大蔵省や厚生省（我々の世界では財務省や厚生省）という役所が存在している。「なるほど1、2、3」（Kindle版）を読んでいただければニュアンスが分かるだろう。どの本も激安の百円（税込）！ よろしくお願いします。

さて、今回の「なるほど・コロナ編」は新型コロナウイルス感染拡大のため急いで執筆したので誤字脱字満載の超未定稿だ。別言すると読者のコロナ・イライラに「なるほど」感を注入するために開発された新型ワクチンのようなもの。

コロナウイルスとか、ワクチンとか、医療体制とか、デジタル庁とか、緊急事態宣言とか……専門家でないとはよく分からないことばかり。しかもこれらの事柄を突っ込んだ解説が少ない。つまり政府の説明やマスコミの報道に「なるほど！」と頷くことがなかなかできない。なぜなののか？ 具体的な対策は？

「専門家会議の意見を聞いて諸般の事情を総合的に俯瞰的に検討した上でスピード感を持って各省庁、都道府県知事と強い危機感を共有し、連携、調整をしながら判断して、前向きに……

……」
こんな政治家の説明はもういい。ご託か五折か、知らないがどうでもいい。それより果たして政治の専門家である政治家（怪しい者が多いが）が感染症専門の医師や医学部教授の意見を理解できるのだろうか。それは医師や教授が政治家の意見あるいはもくろみを理解できないのと同じだ。

それに専門家というのはわかりやすく説明するのが苦手だ。まるで自分たちの専門用語を機関銃のように撃ちまくるような話をする人が多い。ただ先ほどの政治家のように抽象的な言葉を並べ立てるよりはましかも知れない。

官僚は政治家に付度するが、医師や教授（いわゆる御用学者でない限り）は政治家に付度することはまずない。もし付度するのなら医師でもなく教授でもなく、芸能人には悪いが、単なる目立ちがり屋にすぎない。

さて専門家会議や感染症対策分科会で何が議論されているのか？ 第三者委員会でもよく問題になるが、そもそも専門家会議などのメンバーの人選はどのような基準で行われたのか？

その報酬は？ 政府と利害関係はないのか？ 議事録は作成されているのか？ なぜ公開しないのか？

政府からはこう言った「？」に対する説明はないし、マスコミもこれらの素朴な疑問に答えるべく政府に問いただしているとはいえない。

承前（前書に代えて）

本当に専門家なのか。もしそうなら専門家ほどその専門外のことは知らないはずだから、そこを補強するためにどのような知識を持った造形深いほかの専門家の配置を考えたのか。

国難に向かうには実績を上げた老練な専門家の経験に裏打ちされた知識はもちろん必要だが、若い専門家や現場に溶け込むように患者に対応しているあらゆる人々から可能な限り意見を吸い上げることが大切だ。現状報告がトップに届くまでの距離が長くなればなるほど対策が後手後手に回るのは戦争と同じだ。物資だけではなく情報という兵站が長くなると前線は壊滅的な状況になって全滅するのは歴史が証明している。

感染者数が増えてもゴーツートラベルなどのキャンペーンを中止しないし、緊急事態宣言の発出する状況にないとうそぶいていた政府は、少しでも感染者数が減るとすぐに楽観論を展開する。

一応国民の努力のお陰などと持ち上げるが、忘れることなく自分たちの手柄だとアピールする。しかし状況が変わらないか悪い方に向かうと言葉を選びながら（選び方が稚拙）悪いのは国民だと言わんばかりに補償を棚上げして協力金という名称に変えるという姑息な手段をとりつつ一方できつい罰則を設ける。

「言うことを聞かなければムチだ」

国民の言うことを聞かない政府に、国民が政府の言うことを聞く耳を持ってないのは当然なのに、どさくさに紛れて自分たちの権限を強化しようと画策する。

専門家の意見はともかくとして、政府はどう見ても一部の国民、あるいは特定の業種の意見しか聞いていないように見える。要は説明怠慢と責任回避の罪は一切かぶらない。それが権力だと言えどそれまでだが。

権力を持つとおごりが出る。夜遅くまで会食する政治家が現れる。自分たちは特別なのだ。もちろん政治家たちの会食先の料亭なども彼らを特別扱いする。「おまえたちは言うことを聞けばいい」とでは、営業短縮のに協力して八時には店を閉める事業者の反感を買うことになる。夜遅くまで営業した飲食店までもが罰則の対象になるのにそんなところで飲食する政治家には罰則がない。本末転倒の法改正だ。

もう少しの我慢ができない政府と一部の国民。そして前々から叫ばれていた医療現場の混乱と崩壊。政府はあくまでも崩壊と認めずに逼迫と表現する。世界でも有り余るほど多いとされる民間病院は前線からかなり遠いところに存在しているように見える。現にベッドだけカウントすればかなり余裕がある。だから医療費を抑えようと政府は躍起になって病床数や医師の数や薬価を下げようとした。今回混乱する公立の病院までその数を減らそうとした。ここに来て医療従事者が「はい、そうですか」という気持ちにはなれないのは仕方がないこと……だろうか。

悪いのは新型コロナウイルス感染者を受け入れない医療機関だと断定し罰則を設ける。自分たちの政策ミスを検証して責任をとることもなく、ましてや反省などすることなく、他に原因

承前（前書に代えて）

があるとして強硬姿勢に転ずる。

もはや「なるほど」などと納得できる状況ではない。今日も首相は官僚が作成した中身のな
い紙切れを棒読みするだけ。国民は納得できる説明などまったく期待しなくなる。それどころ
か「おまえの顔など見たくないから顔をあげないでくれ」と思うようになる。そんな国民の意
見を首相にぶつけると開き直って怒りだす。「それは余りにも言い過ぎだか」と。

ところが高級官僚が利害関係者から接待を受けていた事実が次々と明らかになると、国民に
向けた怒りをこれら高級官僚に向けるのかと言えば、そうではなくかばう。今度は国民が怒る
番だが、首相は薄ら笑いを浮かべるように顔をあげる。ひよつとして……